

## 和船とその建造技術保存・研究事業

和船建造技術を後世に伝える会  
代表 番匠 光昭

### はじめに

これまで 2 箇年にわたり日本海側を中心とする県内外の博物館に所蔵・展示されている和船・船具・漁撈具等の調査を実施してきたが、今年度は富山県東部の黒部市及び朝日町、新潟県の佐渡島の和船・漁撈具を調査の対象とした。合わせて新潟市歴史博物館で開催された特別展『船と船大工』で展示された木造和船について調査と記録を行った。

また、収蔵している和船の実測図の作製や和船建造に携わった船大工からの聞き取り調査によって、ドブネをはじめとする氷見地域の伝統的な和船の構造や製作方法に加えて、和船を用いた漁撈などについて比較検討する材料を得た。

現存する木造和船の保存・修復作業としては、今年度は石川県志賀町大島でかつて使用されたテンマの修復を実施した。大島のテンマは、氷見のテンマとは船形や使用方法に違いが見られるもので、周辺地域も含めた比較検討に活用できるものと考えている。また今回の修復は、実用に耐えうることも目的のひとつで、今後は櫓漕ぎ体験等でも活用していきたい。



石川県志賀町大島  
船小屋の中の木造船（テンマ）

長期間、船小屋の中で保管されていたため状態は良いが、一部の部品が脱落している。



石川県志賀町大島  
テンマの搬出作業



修復が済んだ大島のテンマ

脱落した部品の再接合をしたほか、船体内部のペンキをはがし、防水剤を塗布した。オモテのカンザシのうえには櫓杭があったが、新造したヤツガシラに交換してある。

## 和船とその建造技術及び漁撈具の実地調査

今年度は、佐渡島(佐渡市)の博物館・資料館が収集・保管している木造和船の実地調査を行った。あわせて、新潟市歴史博物館みなとぴあで開催中の特別展「船と船大工 湊町新潟を支えた木造和船」を観覧し、展示されている和船・出土丸木舟の調査を行った。

### 1. 調査の目的

今回の調査では、佐渡島の木造船及び漁撈習俗の調査を目的とした。佐渡市には、国指定民俗文化財として「北佐渡の漁撈用具」・「南佐渡の漁撈用具」・「船大工用具及び磯舟」といった資料が残されている。また近世に廻船業で発展した小木地区には、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている船大工の里、宿根木集落のほか、越佐海峡最後の木造和船「幸丸」や復元された千石船「白山丸」があり、小木港の海運資料館には船絵馬や船だんすなど廻船関係の資料が展示されている。

今回の調査では、上記の資料が残る両津地区及び小木地区の博物館・資料館を訪れ、展示資料・収

蔵資料の現地調査を行い、氷見市域を含む富山湾・能登沿岸地域との比較検討の材料とした。

また、氷見から能登地域でかつて使用されていた木造漁船に「ドブネ」という船がある。佐渡島には「ドブネ衆」というタビの衆がいてドブネが使用されていたといい、氷見及び能登地域とも深く結びついていた可能性がある。その痕跡をたどることができれば、というのも目的のひとつとした。

なお、この調査の日程と重なる期間で、新潟市の新潟市歴史博物館みなとぴあで特別展「船と船大工」が開催されていた。今回の調査の目的とも合致する特別展であるため、佐渡島からの帰路に新潟市を組み入れ、特別展の出展資料の現地調査を行った。

## 2. 佐渡市小木地区 幸丸展示館・海運資料館

直江津港からフェリーで2時間半、小木港に入港した。小木港ではたらい舟(ハンギリ)の乗船体験を観光用に実施している。用いられているたらい舟は木製のものだが、外面には厚くFRPが塗り付けられている。操船には練り櫂が用いられている。たらい舟は主に小木半島と両津周辺で磯漁に使用されているものである。

さて、小木港すぐ近くに海運資料館、幸丸展示館、考古資料館が併設されている。

### (1) 幸丸展示館

幸丸は、越佐海峡の小木～寺泊間を往来した木造和船である。昭和15年に造船され、昭和36年まで航行した。小木から薪・木炭・真竹などを、寺泊から清涼飲料水など日用品やセメント瓦などを運搬していたものである。

幸丸の構造は、シキにウワダナ・シタダナを接ぎ付けた5枚構造の板船で、氷見ではテントと呼ばれる船型ものに近い。150石積で、全長16m80cm、幅4mを測る。和船と洋風帆船の長所を取り入れた「アイノコ船」であるというが、構造自体は典型的な5枚構造の和船である。3本のマストを用いる点が洋船の特徴だろうか。状態は良いが、トモ側は新材を継ぎ足す補修が加えられているようである。ウワダナの部材の接合にはチキリとヌイクギの使用が確認できる。小木～寺泊間は順風なら4時間、風が弱ければ1日かかったのだという。

### (2) 海運資料館

海運資料館には千石船に関する資料が展示されている。千石船の模型・板図・船絵馬・船だんすなど多くの実物資料が展示されている。当初、初日のみ観覧の予定だったが、急遽予定を変更し、2日目にも海運資料館を訪れ、調査を行った。

## 3. 佐渡市小木地区 佐渡国小木民俗博物館・千石船展示館

小木地区宿根木に、佐渡国小木民俗博物館と千石船展示館が所在する。

### (1) 千石船展示館

宿根木は廻船業で栄えた町である。展示館には、複数残された千石船の板図を基に、512石積の千石船「白山丸」が復元され展示されている。材木には基本的に外材を使わない方針で、地元を中心に東北地方より集められたスギ・マツ・アテ・ケヤキなどが使用されている。全長23.75m、全幅7.24mを測る。造船は、青森県のみちのく北方漁船博物館の「みちのく丸」と同じ船大工の方々が担当されている。

この「白山丸」は海に浮かべることは考慮されていないが、中に入ることができるようになってい

る。実際中に入ってみると、船室の様子や居住区や荷室の空間を実感することができる。内部から見ると多くの船釘が使用されていることがわかるが、建造に使用された船釘の総重量は1トン近いのだという。

漁船として用いられた船とは比較にならない巨大さだが、構造的にはテントなど、5枚構造の和船に通じるものである。

## (2) 小木民俗博物館

小木民俗博物館には国指定有形民俗文化財「南佐渡の漁撈用具」と「船大工用具及び磯舟」が収蔵されており、一部が公開されている。今回は収蔵庫の資料の調査も行った。館内には圧倒的な量の民俗資料が集積されており、国指定の漁撈用具・船大工用具に限っても収蔵庫いっぱい収められている。その中でも磯舟を中心に記しておく。

小木で磯漁に使われる板舟を「磯舟」と呼ぶという(小木町1975)。11艘が収蔵されており、そのうち10艘が国指定となっている。磯舟はシキにウワダナとシタダナを接ぎ付けた5枚構造のものである。氷見で言うテンマと同様の構造であるが、小木ではテンマという名称は使わないという。また氷見や能登のテンマと比較すると細長い印象がある。5艘の大きさを測ったが、全長は大きいもので730cm、小さいもので560cmを測る。氷見のテンマは450cm程度からあり、それからすると大型である。あまり小型のものが無いのは、小回りが利き建造費の安いという舟が存在するからなのかもしれない。小木は岩礁地帯が多いからか、シキの外側に防護材(ナメズレ)が取り付けられているのも特徴である。なお一部の磯舟には、トモ側の底部に船外機を取り付ける穴が開けられている。細長い船体が小木の磯舟の特長であろう。

## 4. 佐渡市小木地区 重要伝統的建造物群保存地区 宿根木集落

小木民俗博物館のある高台から海に向かって下っていくと、宿根木の集落がある。かつて廻船業で栄え、船大工が住んだという集落が町並みごと保存されている。板葺き石置きの屋根の家も何軒が残っている。

実際に集落を歩いてみると、海岸に面し山に囲まれた平地部に密集して家屋が建てられているのが実感できる。板壁に船材が転用されている家もあった。そのまま家並みの間を抜けていくと浜に出る。浜と集落の間に新しい道が付けられているがかつてはなく、その浜で造船が行われていたのだという。

## 5. 佐渡市両津地区 両津郷土博物館

両津郷土博物館は、旧両津市の加茂湖に面した高台に所在する。この博物館には「北佐渡の漁撈用具」として外海府・内海府・両津湾・加茂湖で用いられた木造船をはじめとする漁撈用具が収蔵されている。

展示室には、海と湖で用いられた代表的な和船が6艘展示されている。海船が、大型の「獵舟」、小木の磯舟とほぼ同型の「カンコ」、平底の「コブネ(サンマイハギ)」、湖の船が、「テンゲ」・「ゴリブネ」・「ハコブネ」である。

獵舟とカンコは5枚構造を持つ。コブネはマルキヅクリから変化したといい、以前はシキに刳材を用いていたのだという。いわゆる準構造船の系譜に連なるものなのであろう。

内水面で使用された3艘については大きさ・形状が少しずつ違うが、明確なミヨシ材を持たない点

が共通する。なお、海の船と湖の船は明確に分かれるが、湖の船が海に出ることもあるのだという。また一人乗りの漁船として使われるのは基本的にたらい舟なのだという。

さて、収蔵庫には各種民俗資料に混じり 10 艘の和船が収蔵されている。収蔵されているのは「カンコ」・「テンマ」・「テンゲ」などである。なおカンコ・テンマともに 5 枚構造のものだが、テンマはアバラ材が入れられたものという差異がある。氷見はじめ他の地方では、テンマが 3 枚底、カンコが平底（1 枚底）の比較的小型な船に付けられた名称であるが、佐渡ではいずれも 3 枚底の船の名称となっている。カンコについては刳舟が語源という説もあるのだともいう。

博物館外の正門付近には洋船のカッターに混じって大小 2 艘の大型船（サンパ）が置かれている。全長は、大きいほうで 15m を超す。定置網の網船として用いられたものだという。小さいほうはエンジンが載せられている。検認証によると遊漁船として平成 9 年ころまで使われていたようだ。

夕方、博物館をあとにして加茂湖畔の船小屋をのぞいた。船小屋は湖に半分突き出して建てられており、作業小屋が併設されている。いくつかの作業小屋では養殖されているカキの殻剥きが行われていた。ある船小屋には木造船が繫留されていた。この船は比較的小型のテントと見られるもので、小屋の天井には FRP を巻いたテンゲも吊るされていた。いまだに現役で木造船が使われているということが驚きであった。

## 6. 新潟市 新潟市歴史博物館みなとぴあ

佐渡の帰りに立ち寄り、特別展「船と船大工 湊町新潟を支えた木造和船」を見学した。

エントランスには「チョロ」と「マルキ」が展示されている。これは今回初めて知った形式の船であった。いずれも刳材を一部に使用したものである。

チョロはドブネなどと同じくオモキ作りである。ぱっと見た雰囲気は東北のムダマハギ風でもある。信濃川河口で使用されたという。一方、マルキは 1 枚棚の海船で、「ジョー」という刳材が船首と船尾に入れられている。刈羽郡から西蒲原郡の海岸で使用された。いずれもオモキ作りの分布圏を考える上では重要な船である。

特別展示室には、海船としてサンパ（カワサキづくりの三反型）、キツォをはじめとする内水面の舟、単材丸木舟の田舟のほか、井戸側に転用されていた 13 世紀の丸木舟や、同じく井戸側に転用されていた 18 世紀の板船の船材、船大工用具などなど、バラエティ豊かな展示がされている。

井戸側転用の丸木舟は、旧豊栄市の下前川原遺跡で出土したものである。以前、筆者は氷見市の鞍川 D 遺跡出土の井戸側転用丸木舟と比較したことがあるが、両者はほぼ同時代で、鞍川 D 遺跡のものがやや大きい。舷側上部の方形の穴などを共通点としても良いと思われるが、下前川原遺跡の丸木舟の特徴として、底部側面の方形の穴があげられる。船底部に船梁を入れた跡とも考えられるが、決定的な証拠はない。

## 7. 実地調査を終えて

佐渡島には国指定の民俗文化財として多数の資料が残されていたが、それだけではなく、なお現役で使われている木造船があるように、非常に興味深い土地であった。実見できた木造船は、南佐渡・北佐渡ともに 5 枚構造・3 枚底のものが中心であるが、同構造の氷見のテンマと比較すると細く浅く、そして長いのが特徴であった。一人乗りの小型船としてたらい舟が存在することもひとつの理由であ

ろう。

なお今回、目的のひとつにあげていた「ドブネ衆」については痕跡を確認することはできなかった。だが、かつては準構造船だったという北佐渡のコブネの存在など、興味深い資料を目にすることができた。同様に、新潟市でもチョロやマルキなど、オモキ作りに連なる木造船を実見できたのは幸이었다。

佐渡島は能登半島とは非常に近い関係であり、使われている木造船にも共通点があるかと考えていたが、主体をなす磯舟あるいはカンコ・テンマと呼ばれる 5 枚構造の木造船は、佐渡独特のプローションを持っていた。これらは波の高さなどの自然環境や漁法の違いに影響されているものなのだろう。

## おわりに

平成 17 年度から 3 箇年実施してきた資料の保存・収集・修復、実地調査の調査略報として、『氷見の和船 和船建造技術を後世に伝える会調査報告書』を刊行した。『氷見の和船』では、現存している氷見地域周辺で使用された和船の実測図を紹介するとともに、かつて氷見地域で使用されていた海、川、潟の木造和船について概説した。『氷見の和船』は県内外の研究機関、教育機関等へ送付し、今後の活用に供する。また日本海側沿岸を中心とする地域の和船を比較検討するうえでの基礎資料としていきたい。

そのほか略報に掲載できなかった 3 箇年の成果については、今後、本報告書として刊行し、広く普及啓発及び記録保存に供していきたい。

(文責 廣瀬 直樹)

## 参考文献

赤羽正春 1998 『日本海漁業と漁船の系譜』 慶友社

出口晶子 2001 『丸木舟』 ものと人間の文化史 98 法政大学出版局

新潟県佐渡郡小木町 1975 『南佐渡の漁撈習俗』